



ブラジル特報



特集 “美味しいブラジル”インジャパン

- ・デリシャス・ブラジル！ インジャパン
- ・日本のブラジル料理店の歴史を探る

あの町この町
ベゼーホス Bezerros



新規会員募集中！
詳しくは P21 をご覧ください。

 一般社団法人 日本ブラジル中央協会

URL <http://nipo-brasil.org/> E-mail info@nipo-brasil.org

360° business innovation.



Photographer: Ricardo Teles / Vale



世界の未来を、ブラジルとつくる。

[Business innovation-1]

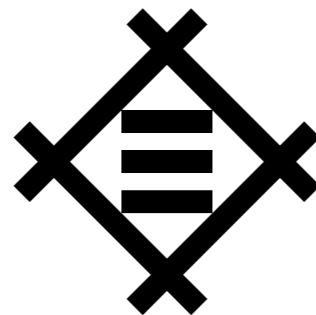
鉄鉱石を安定供給し、世界経済の発展を支える。
ヴァーレ社を通じ、世界最高水準の高品位鉄鉱石を供給。増大する鉄鋼需要に応える。

[Business innovation-2]

水力発電事業を通じ、低炭素社会へのインフラ構築に貢献。
川の自然な流れを活かす流れ込み式水力発電事業を通じ、約1千万人分の電力を大都市圏へ供給。

[Business innovation-3]

ブラジルで、そして世界へ。コーヒーと共に至福のひとつときを。
Mitsui Alimentos社を通じ、半世紀にわたり愛される「Café Brasileiro」を製造・販売。
これからも豊かな食文化をお届けする。



MITSUI & CO.

世界の未来を、世界とつくる。三井物産

目次

- あの町この町
ベゼーホス [Yasuko] 3
- ブラジル・ナウ
日本におけるブラジル食の多様化
[麻生雅人] 5
- 【特集】「美味しいブラジル」インジャパン
デリシャス・ブラジル！ インジャパン
[西原パウリーナ新子] 6
- 【特集】「美味しいブラジル」インジャパン
日本のブラジル料理店の歴史を探る
[山本綾子] 8
- ブラジルにおける国際医療活動に参加して
[横山祐磨 / 木村泰介 / 西垣颯一郎] 10
- ブラジル現地報告
燃えるアマゾンから帰還して
[下郷さとみ] 12
- 連載・日系企業シリーズ第61回
ティー・エス グループ 日本での活動
[斎藤敏男] 13
- 連載・ビジネス法務の肝
スタートアップへの投資
[柏 健吾] 14
- 連載・税務の勘どころ
世間の注目を集めている税制改革案の概要
[ピニウス・マルクス / 吉田幸司] 15
- エッセイ
ブラジルに渡って40年(後編) [飯島秀昭] 16
- ウーマン・アイ
ブラジルお産事情とドゥーラ [鈴木友紀菜] 17
- ジャーナリストの旅路
リオデジャネイロと東京、五輪に想う [平山亜理] 17
- 連載・文化評論
テーマはおカタイ歴史小説
『奴隷制(第1巻)』がベストセラーに
[岸和田仁] 18
- 最近のブラジル政治経済事情 19
- キャンパス・コラム
ブラジルの大学生と大統領選挙 [佐藤海斗] 19
- 新刊書紹介 20
- 連載・ブラジルあれこれ
ベレンのブックフェア 20
- 協会からのお知らせ 21



写真=永武ひかる
「表紙のひとつ」
「リオの親子連れでにぎわうフェスタ。思わず目を奪われたのは出店のお菓子、キンジン。ブラジルの代表的なスイーツだ。卵黄にココナッツと砂糖がたっぷり。売主はバイア州の女性バイアーナ。王道の民族衣装で決めている。」
(永武ひかる：ブラジル撮影約30年、著作に写真絵本「世界のともだち3 ブラジル」(備成社)等。www.hikarunagatake.com)

あの町、
この町

ベゼーホス Bezerros

北東部のフォークアートや手工芸のアーティスト達を訪ねてペルナンブーコ州の州都レシーフェから内陸の乾燥地帯、セルタウンへ続く国道232号線を旅した。レシーフェから車で2時間程のブラジル最大の野外マーケットが立つ町カルアルは有名だが、その少し手前の人口6万人程のベゼーホス市にブラジルを代表する木版画家ジョゼ・フランシスコ・ボルジス=愛称 J. Borges (ジョタ・ボルジス) のアトリエ「Memorial J. Borges」がある。その頃の私は、なんとなく北東部に素朴で素敵な版画があって、その版画家はかなり高齢だという程度の知識しかなく、果たして本人に会えるかどうか疑問だった。が、アトリエを訪ねると、全くの現役のご本人が木版を力強く彫っていた。周りには数名の弟子もせせと作業中で、家族を含め10名程度のスタッフが手分けをして版画に色付け、擦る作業をしていてとても活気があった。



ボルジスの版画はこの地方のフォークロアや動植物を題材とし、素朴で馴染みやすい。ペルナンブーコ州の人間文化遺産に指定されている。

1935年に農家の息子として生まれたボルジスは、8才で父の仕事を手伝い始め、自分で編んだ籠を市場で販売するなどして家計を助けていた。テレビや新聞がない時代で、6行詩スタイルのコルデル文学を市場で買って繰り返し読むことが大好きになったが、コルデルはヒーロー物やラブストーリー、社会風刺、政治批判などを題材とする小冊子文学で木版画が表紙を飾っていた。学業優秀で小学校は10ヶ月で繰上卒業、その後木工細工を製作販売したり、肉体労働をしたりしていたが、やがて自分自身でコルデル制作を始め、20才で自作の木版画で表紙を飾ったコルデルを発刊した。独特の版画技量が認知されるようになって木版画の制作依頼が急増、30代半ばごろから様々な賞を受賞しており、版画家として国内のみならず、世界的にも認められる芸術家となった。



18人いる子供のうち17人目のパブロは7才で版画を彫り始め、現在後継者として高齢のボルジスをサポートしている。「父の様になりたい」と子供の頃からの思いがあり、後継者として誇りに思うと語る。

この11月に駐日ブラジル大使館で「ブラジル北東部の木版画展」の開催が決定し、パブロが来日してくれる事になった。

木版画という北東部の素朴で伝統的なアートが若手後継者によって受け継がれ、世界中で愛されていく事に熱い思いが込みあがる。



Yasuko (コロリーダス(隣)代表)



グローバル人材の採用なら

日経HRは、日本経済新聞グループの人材情報企業として、新卒向け就職事業、社会人向け転職事業、キャリア教育事業をメインに展開しています。

日経HR独自の情報に加え、日本経済新聞社や日経BP社のコンテンツをベースに就職活動、学び、スキルアップ、キャリアデザイン、転職などのHR (Human Resources) 情報をインターネットや出版、イベントなどのクロスメディア展開により発信していきます。

日経アジアリクルーティングフォーラム

2013年8月に第1回フォーラムを開催。毎年、アジア主要国のトップクラス大学で学ぶ現地学生の日本企業就職を支援。各国での企業説明会や、日本で学ぶ外国人留学生のための就職支援など、グローバル人材を求める日本企業のニーズにお応えしています。



日経キャリアNET

社会人のための転職サイト。日本経済新聞や日経・電子版、日経BP社の各種専門媒体を入り口としたビジネスに意欲の高い求職者と、人材を企業戦略の中核と意識する優良企業を結びつけます。



日経キャリアNET
<https://career.nikkei.co.jp/>

キャリアコンサルティング(人材紹介)

エグゼクティブ、金融、IT系人材を中心に、人と企業をピンポイントで結ぶ人材紹介事業を展開しています。日経キャリアNETや日経グループ各媒体との連動やアライアンス・エージェントとの連携など、さまざまなご提案も行っています。



日経HR
NIKKEI HUMAN RESOURCES executive
<https://www.nikkeihr.co.jp/executive/>

日経メディアで複合プロモーション

日経新聞・日経電子版、日経BP専門媒体(雑誌・Web・メルマガ・フォーラム)を活用した日経メディアの複合プロモーションで人材採用活動をお手伝いします。



仕事の先の幸せを創造する会社

日経HR
NIKKEI HUMAN RESOURCES

日本におけるブラジル食の多様化

日本で味わうことができるブラジルの味の選択肢は、年々、着実に広がりを見せている。特にこの2~3年は、ブラジル料理の専門店以外で楽しむことができるケースが増えている。

例えば、都内で19店舗を運営する大手カラオケチェーン店「パセラ」は、2019年11月末まで、タペレバやグラヴィオーラといったトメアス産果肉パルプを使ったメニューを提供している。タペレバに至ってはスイーツだけでなく食事の料理メニュー(タペレバライス!)にも使われている。

これは日本企業が、多くの日本人にとって「未知の味」であるアマゾンフルーツがエンターテインメントたりうると判断して導入したと思われる一例だが、昨今、日本で広がりを見せているブラジルの味は、まさに、「未知の味」としてだったり、「食材の機能性」や「食材の背景にあるストーリー」と共に「高い付加価値を持つ商品」として消費されているようだ。以下、さらにいくつかの実例を紹介しよう。

2017年以降、帝国ホテルのパークサイドダイナーでは「ヘルシーエナジーブレイクファスト」と銘打ち、ブラジル食の朝食メニューを提供している。マンジョッカ粉を使ったグルテンフリーのケーキ、ボンデケイジョ、アサイーのヨーグルトなどがセットになったこのメニューは、ハムや卵を中心とした献立とは異なるヘルシーな洋食の朝食を求める宿泊客に人気なのだという。

ボンデケイジョといえば、ブラジルではマンジョッカ芋のデンプンでつくられ小麦を使わないことからグルテンフリー食品としても再評価が高まっている。この点に着目したアピールが功を奏し、セブンイレブンにも、パッケージでグルテンフリーとうたわれている冷凍食品のボンデケイジョが導入された(静岡県のブラジル系企業による製品)。全店舗が扱っているわけではないが、SNSでの投稿も増えているので、話題になれば取扱店も増える可能性はある。

2019年に実現した最も画期的な事例は、フランスの著名なシェフ、アラン・デュカスが指揮するレストラン「ブノワ」が、クプアスとカカオの果肉パルプを使ったデザートを提供したことだろう。バレンタインデー時期の限定メニューではあったが、同店で提供されるメニューは期間限定であろうとも、本国の承認が必要となるという。クプアスとカカオのパルプは、毎年来日して年間のメニュー作成

を指揮するクルーに認められ、「ル・ショコラ・アラン・デュカス」のチョコレートを使って作られた。

本メニューは、会員制のレストラン・ネット予約サービス企業が、提携レストランに対し、カカオやクプアスが持つ純粋な食材のポテンシャルに加え、まさに「未知の味の体験」と「食材の背景にあるストーリー」をセットにして提案したことが、商品化を実現させるきっかけとなったものだ。

ワインやクラフトカシッサにおいても、同じ方向性のセールスが行われている。

サルトン社のワインは、すし店やオイスター料理専門店など、扱うレストランの幅を広げている。これは輸入業者による、個々のワインの個性を見極めて、それぞれのワインに合う料理店にピンポイントでセールスを行うというきめの細かい営業努力が実を結んだ結果であることは言うまでもないが、日本との間に関税協定がある国とは価格の面で競争のしようがなくとも、「今までにないマリアージュ」を丁寧に提案することで開拓できる市場があるということが実証された例といえよう。

クラフトカシッサは、実に多様な種類の樹木が熟成の樽の素材に使われる点で世界にも類を見ない個性に満ち溢れた飲み物となっている点が、最大のセールスポイントになりうると筆者は考えている。ブラジルの自然が持つ多様性があるからこそ享受できるこの産物は、ダイバーシティをめぐるストーリーもセットで販売することが可能な商材だ。2020年4月~6月には赤坂界隈の有名ホテルにあるラウンジバーにてカシッサフェアが開催される予定があり、各種カシッサの利き酒も計画されている。

これらのアイテムは、決して廉価な商品ではないし、大手の商社が扱うようなロットのものでもない。しかしブラジルは、個性的で品質の高い産品の宝庫だ。決して廉価ではなくても、他に類のない味や香り、ストーリーがあれば商品となりうることを理論ではなく実証して見せた点で、「ブノワ」の事例は今後の大いなる指針となりうるだろう。そして、このような産品が着実に日本人の生活、それもクオリティ・オブ・ライフの向上に気を配る消費者の間に浸透していくことによって、日本におけるブラジルという国に対する印象もより向上していくことだろう。

麻生雅人 (『MEGABRASIL』編集長)

デリシャス・ブラジル! イン ジャパン



西原パウリーナ新子
〔「ブラジル特報」編集委員〕

食のダイバーシティ ブラジル

「デリシャス・ブラジル!」と聞いて、まず何を思い浮かべるだろうか? おそらく大半の人が「シュラスコ」を思い浮かべるのではないだろうか。ブラジル料理

といえば大きな串刺しの肉の塊を焼いて、目の前で切り分けてくれる、ワイルドなブラジル風焼肉! 一度も食べた事のない人は、日本の街中でよく見かける中東の「ケバブ」と混同する人も多い。一番キャッチーでエンターテインメント性もあるシュラスコは、インパクト抜群! 日本のメディアにも多数取り上げられ、すっかりブラジルを代表する料理にまで登りつめた。

でも、そもそもブラジル料理って何? ブラジルの国土は広く、日本の約23倍! そして、ブラジルは先住民であるインディオや歴史上かつての宗主国ポルトガルとその民、アフリカ系奴隷、日本を含む世界各国からやって来た移民で構成される、国土面積世界第5位、世界人口第6位の大国家だ。こんな大きな国の人々の胃袋を満たす食はまさに千差万別、バラエティに富んでおり、地域によって特色がある。あらゆる食文化が融合した「多様性」こそブラジル料理の一番の特色かもしれない。

例えば先のシュラスコは、ガウーショと呼ばれるブラジル南部のヨーロッパ移民達がルーツ。また、先住民インディオたちの食文化をルーツとする北部アマゾン料理やプランテーションの働き手として連れてこられたアフリカ系の影響が色濃い北東部アフロ・バイア料理も多様なブラジル食の一面をなしている。そして、



シュラスコ▼

リオデジャネイロやサンパウロがある南東の地域は、ここだけで人口約1億人すなわちブラジルの人口の約半数を占める。民族的にも多様で、白人が約6割(イタリア系移民が多数)、日本人の最大移住先のサンパウロが含まれる事から日系人も多い。リオはポルトガル植民地時代のかつての首都であり、ブラジル各地域の料理やポルトガル本土の料理も多く集まった。ポルトガル料理の代表的な食材であるバカリャウ(タラ)を使った料理も豊富だ。私が16年間住んでいた経済の中心地、サンパウロ市はこうした様々な起源を持つ世界中の料理が食べられる、まさにブラジルナンバー1のグルメシティだ。



フェイジョアード▲▶

フェイジョアードなどが買えるようになった。「フェイジョアード」とは、ブラジルを代表する料理のひとつで、黒フェイジョン(インゲン豆)を牛や豚のあらゆる部位(耳や尻尾、臓物、足、腸詰、干し肉も含む)と共に煮込んだ料理だ。このフェイジョアードの缶詰は私の母いわく、もっと美味しく食べられるようひと工夫が必要とか。にんにくと玉ねぎをオリーブオイルで炒め、さらにソーセージと水を加えたりして缶詰フェイジョアードの味を調えるそうだ。

ブラジルの公立学校給食

私はブラジルに着いた直後から、2年間「語学特待生」として午前中はサンパウロ市立小中学校でブラジル人の子供達と一緒にポルトガル語の基礎を学び、午後からはまだ大学生の年齢ではなかったが、特別にUSP(サンパウロ大学)で語学教室に通い、世界中から来ていた留学生達と共に給食や学食にお世話になった。公立の学校では授業の合間に時々無料のおやつや軽食が出た。全員にもれなく配られるのではなく、希望者のみ自分で取りに行くシステムだ。「ボラッシャ」と呼ばれる甘いビスケットと砂糖たっぷりの甘いマテ茶だったり、「アホース・ドッセ」というお米を牛乳と砂糖で甘く煮詰めた見た目おかゆのスイーツだったり、「ボンジンニョ」という小さなフランスパンにチーズとハムを挟んだサンドイッチの時もあった。そして一番人気でいつも長蛇の列ができるのは「アホース・コン・フランゴ」と呼ばれていた油ごは



カイピリーニャ▶



んにトマトベースのソースで煮込んだ骨付の鶏肉が添えられた一皿だ。これがなんと美味しかった! 特別な材料、調味料が使われているわけでもないシンプルな料理なのに、なぜか家ではなかなか再現できない思い出の味だ。大学は立派な食堂があり、学食(有料)があった。係のおばさまが金属のプレートにブラジルの定食を盛り付けてくれる。アホース・フェイジョン(ごはんを煮たフェイジョン豆)、サラダ、牛豚鶏などのステーキとマッシュポテトやポテトフライ、マカホナーダ(パスタ)など定番メニューが多く、空腹時には美味しく感じられた。

日本のシュラスコ

日本で本格的にシュラスコを根付かせたお店は、なんとといっても今年でオープン25周年目を迎えた【バルバッコア】



と言えるのではないだろうか。1994年6月、東京・青山に1号店をオープンさせた。時代はバブル末期、Jリーグの発足・開幕でブラジル人選手が多く起用され、シュラスコはブームになった。今では日本全国に数多くあるシュラスコ店とバルバッコアの大きな違いは、ブラジル本国に本店を持っているということだろう。ブラジルではそれまでシュラスコといえば一般的には「ホジージョ」という食べ放題システムで、お肉をひたすら食べるだけの無骨なスタイルだったが、バルバッコアブラジル本店(サンパウロ)は1990年に新鮮な野菜が食べられるサラダバーをもうけ、ハイエンドで洗練されたシュラスコ店をオープンした。ラグジュアリースタイルのシュラスコはその後大ブームになり、バルバッコアはその先駆けとなる

店となった。そのコンセプトは忠実に日本店にも引き継がれているが、日本人に合わせて特別な取組みもしていると、同店ブランドマネージャーの浅田フラヴィオ氏は言う。中でも日本店でのみ使用されている肉を焼くマシン「シュラスケイロ」は日本のオリジナル。この25年間で改良に改良を重ね、企業秘密の技術を集めて世界最高峰の性能を誇っているとのこと。私がブラジルに住んでいた頃はよく家族でシュラスカリアに出かけていたのだが、日本のバルバッコアで食べるお肉はどこか繊細で上品な味わいだ。同店は現在東京に6店舗、大阪に2店舗を展開しているが、来年2020年4月頃東京虎ノ門にもう1店舗新規オープンを予定している。

カイピリーニャ

日本では心から満足する本物の「カイピリーニャ」には出会えない。少し前まではそう思っていた。カイピリーニャはブラジルを代表するカクテルだ。ベースは「カシャッサ」や「ピング」などと呼ばれるサトウキビの蒸留酒で、これをライムによく似た柑橘果実と砂糖、氷をミックスして作る口当たりのいいカクテルだ。材料はたったこれだけなのにブラジルと日本ではちょっと味が違うように感じる。それは主にライムの種類と量の問題ではないかと個人的に思っている。ブラジルで最もポピュラーなレモンは「リモン・タイチー(タヒチ)」と呼ばれる品種で、カイピリーニャはもちろんのこと、ジュースや料理全般に幅広く使われる王道レモンだ。直径5センチくらいの丸い形、グリーン色の薄い皮、果汁が多く、マイルドな酸味、種はほとんどなく、果肉は香り高い。ブラジルの気候と風土に合わせて品種改良されたレモンで、シリアレモンとベルシャライムを掛け合わせた結果、品種的にはライムに近いと言われている。生産地はサンパウロがダントツ1位で国内消費量の約70%を生

産している。このレモンの味と香りがどうしても日本のライムと違うのだ。でもないものは仕方がない。日本にあるライムでもよく似たカイピリーニャは確かに作れる。だけど如何せん1杯あたりに入っているライムの量が少な過ぎると声を大にして言いたい! ブラジルは最低でもグラスの半分はライムが入っているが、日本の大半の店はほんの申し訳程度しか入っていない。日本は全般的に果物が高い。コスト的な事情もあろうかと思うが、いつも残念で寂しい思いをしてしまう、それが日本のカイピリーニャなのだ(あくまで私的意見)。そんな中でも少なからずおススメはある。前述のバルバッコアでは今年になってからブラジル本国の作り方に忠実に従うようレシピを変えた。当然ライムも増量されており、甘さのバランスもよく、かなりブラジルのものと近い。オーダーの際は砂糖少なめではなく、ぜひそのまま。もうひとつはベースのカシャッサの種類が選べる東京・人形町にあるポテッコ・ボンフルート。カシャッサでカイピリーニャの味わいが変わる楽しみがある。個人的にはクラッシュアイスというところも好き。いつか日本でカシャッサ専門店ができないかなと密かに楽しみにしている。

ブラジルの「食」については本当に話が尽きない。先日のラグビーワールドカップでは日本代表チームが大活躍だったが、国籍主義ではないチーム構成もその強さの秘訣かもしれない。今や「多様性」は世界的なキーワードだ。ブラジル料理は多様性に満ちている。シュラスコだけでなく、もっとたくさんのブラジル料理が日本でも楽しめるようになるといいなと願うと同時に、日本人達にブラジルでしか食べられない本場の味をぜひブラジルまで食べに行ってみてほしいとも思っている。

日本のブラジル料理店の歴史を探る



山本綾子
(『ブラジル・カルチャー図鑑』著者)

日本のブラジル料理店の歴史を改めて紐解こうとしても、前世紀についてはインターネットや西欧料理店以外を特集したレストランガイドも珍しい時代であった。店の入れ替わりに加え、人々の記憶も曖昧で確証ある情報の入手はなかなか難しい。東京育ちのアラフォー世代である筆者の最初の記憶といえば、90年代半ばにオープンしたの表参道バルバッコアに両親とともにいったことである。今回の特集では、主に当時の店に関わっていた方々に加え、在日30年以上のブラジル人やブラジル通の70歳前後の諸先輩方に半世紀前までの記憶を伺った。その上で断片的な情報をつなぎ合わせ、初期の歴史をまとめた。2000年頃までのブラジル料理店は、大きく分けて以下4つのカテゴリーに分けられるようだ。本稿では、以下1～3は東京都内、4は神奈川県横浜市鶴見区の実例について述べていく。

1. 生演奏やサンバショウの店 (1970年代半ば～)

日本で最も古いブラジル料理店と言われ、現在も続く老舗が四谷の「サッシベレレ」だ。1974年、日本のボサノヴァ歌手、小野リサの父である小野敏郎氏(2012年逝去)が約15年のブラジル生活から戻り、現在の場所に構えた店である。当初は1階で洋食屋「愛」も経営していたが、そこで食事を終えた客が飲み立ち寄り場所として地下に作った穴蔵風の小さなバーだった。芸能ビザで来日していた本場のミュージシャンによって、ボサノヴァやサンバなどのショウが毎晩のように開かれていた。学校帰りの小野リサが学生服で歌っていたこともあるという。

ほぼ同じ頃、やはりブラジル音楽の生

演奏が聴ける「コルコバード」が赤坂にオープンした。「サッシベレレ」よりクラブ的な雰囲気が強く、店のママはやはりサンバウロ帰りだった。

これら2店の開店前夜にあたる1960年代後半から70年代は、ブラジルへの日本企業進出がピークに達し、空前のブラジルブームであったのはご存じのとおり。どちらの店も、商社やメーカー勤務のブラジル駐在帰国者が遠いブラジルを懐かしむ貴重な場となっていた。そしてバブル到来。四谷の洋食店「愛」は早々に閉店したが、地下の「サッシベレレ」は店を拡張し、一時期はブラジル人の接客ホステスまで置いていた。

小野リサを世に送り出したドラマの吉田和雄氏は、両店で開店初期から演奏をはじめ、今も「サッシベレレ」で名コンビ・シキニョと迫力ある演奏を披露する。吉田氏によれば、ブラジル料理としては「サッシベレレ」の方が本格的で、食にこだわりのある主人がメニューを工夫していた。日本で調達できなかったフェイジョン豆はブラジルから仕入れたり、パステルの生地は近くの製麺所に特注していた。「コルコバード」にもパルミットやパステルなどがあり、特に美味しかったのはスパゲティのアーリオ・オーレオと懐かしむ。

当時、もう少し安くブラジルの軽食とライブ音楽を楽しめるバーが、現在も北青山にある「ブラッサオンゼ」だった。先の2店が比較的高いクラブ風な店である一方、「ブラッサオンゼ」は、慣れない日本生活を送るブラジル人留学生などにとり、東の間の息抜きの場所でもあったという。残念なことに、本年11月末に同店も38年の歴史に幕を閉じる。



▲80年代前半の「サッシベレレ」(サッシベレレ提供)

80年代半ばには、「サンバパチオ」というサンバを見せる店が六本木で話題になっていた。今でこそ浅草のサンバカーニバルなどを通じて知られているが、当時の日本でブラジル人女性ダンサーが露出度の高い衣装を着てサンバを踊る姿は衝撃的。こちらも席チャージが高く、バブル期の業界人や芸能人などが出入りしていたという。

これら70年代中頃から80年代に都内に出現した店は、いずれもエンターテイメントやナイトクラブが流行したバブル景気の波にも乗り、音楽やサンバショウを通じ、ブラジルという遠い異国を体験できる店として賑わった。いずれの店もブラジルの軽食は提供していたものの、料理はメインではない点が共通している。

2. シュラスコ専門店の登場 (1990年代はじめ～)

バブル時代の終焉とともに海外旅行や異国文化に関心を持つ人が増え、各国の食に対するグルメブームが到来した。1991年、まずは「バックナー」が渋谷にシュラスコ専門店として第一号店をオープンした。肉をあらゆる部位に分けて、一部は串刺しにしてテーブルまで回り、客は食べたい部位を食べたい分切り

分けてもらいトングで掴むという前代未聞の食事スタイル。その後、同店は銀座、大阪、金沢へと展開し、各地でシュラスコブームを巻き起こした。

ブラジルで圧倒的な知名度があり、1994年に表参道に開店したのが「バルバッコア」である。サンバショウもあった賑やかな「バックナー」とは異なり、落ち着いた高級路線がコンセプト。ランチ時は近隣ビジネスマン向けにシュラスコ以外のステーキメニューを用意したり、ブラジル駐在帰りの日本人家族が本場を懐かしんで来店するようになった。そして、1993年のJリーグ発足で空前のサッカーブームが起こると、ブラジル人選手の報道に伴いシュラスコの知名度はさらに高まり、各地のシュラスコ店にサッカー選手やサッカーファンも来店するようになった。

3. シュラスコ以外の料理ニーズ (1990年代半ば～)

こうしたシュラスコ専門店が広まるにつれ、シュラスコ以外のブラジル料理や家庭料理を売りにする店も増えた。六本木の「アカラジェ・トロピカーナ」(1993年～2008年)や神保町の「ムイト・ボン」(1994年～2009年)は食べ放題以外に、シュラスコ盛り合わせプレートや一品料理をメニューに加えた。

1997年から約3年間、西新宿にあった「エスキナー・ド・ブラジル」もその一つ。かつて店に足を運んでいたブラジル通の間では「幻の名店」と言われるほどの評判だった。白米、フェイジョン、ジャガイモのピューレ、サラダが付け合わせの定食は人気で、Bife à parmegiana、Bife acebolado、Cupim cozidoなど種類も豊富だった。その他、ムケッカは毎日、フェイジョアーダは現地の習慣にない水曜と土曜限定。同店のオーナー兼シェフであった三浦マリエ氏によると、客は多かったが皆と友達になってしまい、仕事にならなくなったことも閉店の理由という。そんなブラジルらしいエピソードを持つ名店に行けなかったことが悔やまれる。



▶1994年オープン時の「バルバッコア」(株式会社ワンダーテーブル提供)

4. 在日ブラジル人コミュニティで生まれた店 (1990年～)

1990年に日本の出入国管理法が改正され、3世までの日系ブラジル人とその家族の受入れが始まった。すると、当時不景気であったブラジルに暮らす日系人の間で出稼ぎブームが起きた。

出稼ぎ者は、自動車や機械メーカーなど期間労働者を多く雇用していた工場地帯に集まった。最初は2年契約で渡航したが、その後多くが日本での定住を望み、永住権や日本国籍を取得した。このような地域では、在日ブラジル人向けの新聞や雑誌が発行され、料理店や食材屋が自然発生的に生まれた。

横浜市鶴見区の少し特殊な経緯は興味深い。京浜工業地帯の一角で、関東大震災以降、沖縄をはじめ全国から人々が移り住み、工場労働者が住む街として発展してきた。90年以降、出稼ぎブームが起きると、沖縄出身者が多かった同区に、沖縄系日系ブラジル人の2世や3世が親族や知人を頼って多く住むようになったという。記録では、1996年鶴見区在住のブラジル国籍者は1,415人。90年代前半には、ブラジル食材屋「トゥッカーノ」やバー「ぶーがる」が開店し、この2店は現在も営業を続けている。その他数店の食材屋や料理店、軽食屋が点在し、地元ブラジル人の心の拠り所となっている。

筆者は本年9月22日に「鶴見ウチナー祭」に立ち寄ったところ、多くの沖縄系屋台に交じり、ブラジル料理系屋台が存在感を放っている姿を見て、鶴見の持つ多様性を実感した。

最後に、料理に必須となる食材の流通

ルートについて触れたい。日本におけるブラジル食品輸入のパイオニアであるイマイグループは、創業初期はブラジルの日本移民向けに食品等を輸出していたが、現社長の今井譲治氏が入社した85年頃から、当時のニーズにあわせてブラジルからの輸入が中心となった。90年以降は、出稼ぎコミュニティでの劇的な需要の高まりを受け、取扱品目は一時期約500アイテムにまで増えた。リーマンショック後に在日ブラジル人は激減したが、現在でも全国約200か所にブラジル輸入食材を卸している。今井社長によると、全国の在日ブラジル人コミュニティでは、まずは小さな料理店ができ、店内の一角に食材を陳列するようになり、そのまま商店やスーパーに発展するケースが多かったという。

以上、日本におけるブラジル料理店の初期の歴史をざっと振り返った。ここ10年ほどは肉ブームに伴い、都内ではシュラスコ店やそこから派生した個性ある店が増えた。現在に至るまで、その時々々の社会背景を反映しながら、ブラジル料理は全国各地で確実に身近な存在になっている。ブラジルでは「手巻き」や「ヤキソバ」が市民権を得たが、日本では不動の地位を築いたシュラスコの他、地方を中心にブラジル人との共生がさらに進み、今後どのようにブラジル料理が日本人の食生活に浸透していくか楽しみだ。

【お知らせ】

拙著『ブラジル・カルチャー図鑑』(スペースシャワーボックス)は一部改訂版を本年11月に出版予定。改訂版では「日本に出会えるブラジル」、巻末には「全国のブラジル料理店リスト」を掲載!お問合せ: ayakoyama718@gmail.com



▲現在、鶴見区にある食材・軽食店「クリショップ」(筆者撮影)



ブラジルにおける 国際医療活動に参加して

慶應義塾大学医学部国際医学研究会第42次派遣団



横山祐磨 木村泰介 西垣颯一郎



慶應義塾大学医学部国際医学研究会は、毎年南米を中心に世界で国際医療活動を行なっている団体でございます。本年度、第42次派遣団が7月14日から8月17日にかけてブラジルで活動を行なって参りましたのでその一部をご報告させていただきます。

① マナウス 7月15日～7月22日

熱帯医学研究所病院訪問、アマゾナス連邦大学訪問、アマゾン川巡回診療船同乗実習、在マナウス日本国総領事館訪問を行なった。

熱帯医学研究所病院は感染症を多く扱うマナウス市内の公立病院であるが、リーシュマニア症の患者や毒蜘蛛に噛まれた少年など日本ではほとんど遭遇しない症例も見学させていただき貴重な経験となった。

続いてアマゾナス連邦大学、付属病院を訪問した。「アマゾン川地域と慶應義塾大学の関係」をテーマに発表したが、多くの医療関係者が集まって下さり、発表終了後には多くの質問をして下さった。発表を終えた後に病院内を案内していただいた。予想以上に設備が充実していること、そしてそれにもかかわらず病院内に稼働していないエリアが多くあることに驚いた。病院見学を通じてブラジルの医療制度の問題を感じるようになった。

続いて、5日間かけてアマゾン川で巡回診療船に同乗した。合計7つの村を訪問し、医師、歯科医、看護師、看護アシスタント約25名のチームで活動し総合診療を行なった。実際に巡回診療船に乗ってみて、アマゾン地域でこれほどのプライマリケアが提供されていることに驚いた。専門的な治療が必要な場合にはマナウス市内の病院で治療を受けることもできる。全てSUSによる公的なサービスであるため、治療を受けるまでの待機時間の問題もあるであろうが、街から何時間もかかる小さな村でここまで手厚いサービスが提供されているとは思わなかった。我々は血圧測定などを担当したが、診察を行なっていく中で、まだまだ感染症が村では大きな問題となっていることを痛感した。

最終日に、在マナウス日本国総領事館を訪問した。マナウスでの活動をご報告するとともに、マナウスと日本人の関係に

ついてお話を伺った。総領事館の方のお話の中でいただいた「ブラジルは日本の鏡」という言葉通り、ブラジルには多くの学ぶべき点があることをマナウスでの活動で実感した。

② ブラジリア 7月23日～7月25日

ブラジリアでは Sarah Kubitschek 病院見学と国軍病院訪問を行なった。

Sarah Kubitschek 病院はブラジルで最大の整形外科病院であり、独自に開発した設備や病床の環境によって高度な医療を提供していた。この病院では公的保険で治療を受けることができていた。患者はあらゆる地域から来ており、そのエリアの広さはブラジリアだけでは留まらずブラジル全土であるとのことであった。本当に治療が必要な患者に治療を提供することができる病院であり、非常に健全だと感じた。高性能な顕微鏡を用いた病理診断から、細部にまで独自の設備を揃えており、様々なものを取り入れることで高度な医療を提供していた。また、病棟は非常に開放的な空間となっており、病棟の空間の中ではしきりなどもほとんどなく何床ものベッドが並んでいた。ほかにも、標本室は衝撃的でありとあらゆる整形外科関連の病理標本が置いてあった。患者さんをこの部屋に連れてきて直接標本を見せながら病態の説明をすることで、病態を理解してもらうという意図があるとのことであった。

続いて国軍病院を訪問した。この病院の責任者が日系人の松田中将であり、松田中将に我々の活動についてご説明させていただいた。その後院内に移動し、集中治療室、高圧酸素療法施設、核医学検査施設、教育・研究施設を見学させていただいた。高圧酸素療法施設は軍特有の施設で、なかなか拝見できない設備を見せていただき、大変貴重な経験になった。

③ クイアバ 7月26日～7月30日

Júlio Müller 大学病院訪問、Tesessaude Mato Grosso の訪問を行なった。

まず始めに、Júlio Müller 大学病院の外来見学を行なった。ハンセン病やリーシュマニア症など日本では馴染みのない感染症を目の前にして、改めて感染症の恐ろしさを感じたとともに、自分の見てきた医療がほんの一部に過ぎないと思った。続いて、ブラジルの遠隔医療の現状を調べるために Nucleo Tecnico Cientifico de Telessaude を見学させていただいた。この機関はマットグロッソ州の遠隔医療を統括して

いる機関である。第42次派遣団の活動目標として南米の遠隔医療の現状の調査を掲げており、スイスで行われた WSIS Forum 2019 にて表彰されたマットグロッソ州の遠隔医療を勉強させていただいた。遠隔教育、遠隔相談、遠隔診断を提供することで、1年あまりで65万レアルの削減をできたそうで、コスト面での削減を達成できているほか、患者にとっても交通費や時間の節約にもなっているそうで、改めて遠隔医療の有用性を実感した。

④ ドウラードス 8月1日～8月8日

Associação medicos da floresta という NGO 団体の活動に参加し、眼科検診、眼鏡の配布、そして手術が必要な患者のスクリーニングを行なった。Associação medicos da Floresta はブラジルの NGO 団体であり、「森で働く医師たち」を意味する。元々はシグー保護区内で生活する先住民民族への眼科検診活動を主としていたが、現在ではブラジル各地に存在する先住民を対象として巡回診療を行っている。州に検診のロールモデルを提示し、州主導でこのような活動が展開されることが最終目標だそうだ。

マットグロッソドスル州ドウラードスに移動し、インディオの方々へ眼科検診を行った。インディオは都市部周辺に住んでおり、街のインディオとしてはブラジル最大の規模であった。約900人を検診したが、都市部周辺に住んでいるものの、行政が検診を行っていない上に SUS が機能せず手術を受けるのにも数年待たなければならないなどの理由から眼科疾患を抱えたまま放置している方が多くいらした。

検診と並行してドウラードス市内の病院の見学も行った。今後の方針として、再び検診を行い、白内障患者が200人ほど集まったらまとめてドウラードスの医療機関に場所を借りて手術を行うとのことだった。検診最終日にインディオの方々からセレモニーを開いていただいた。このセレモニーを持って本活動は終了となったが、この1週間でブラジルではたとえ街の近くに住んでいても医療が十分に提供されていないことを痛感した。より街から離れた地域ではさらに病気が放置されたままの方が多いのではないか。今後も検診の必要性を政府に訴えていかなければならないという現状を知った。

⑤ ポルトアレグレ 8月10日～8月12日

Pontificia Universidade Católica do Rio Grande do Sul (PUCRS) 訪問、イボチ巡回診療、リオグランデ・ド・スル連邦大学病院訪問を行なった。

PUCRS では図書館や大学内にある科学ミュージアム、スポーツ施設や神経研究の専門施設である InsCerなどを訪問したが、非常に充実した施設を有していると感じ大変興味深かった。

続いてポルトアレグレから車で1時間ほど移動しイボチという地域を訪れ、巡回診療を行なった。このイボチは53年前に日本人が葉野菜や花などの栽培のために移住してきた土地で、当初は120世帯ほどが暮らしていたそうだ。この地



域には今でも日系1世の方が60～70人ほど暮らしている。このような移住地では1世の方は医療機関で話されるポルトガル語を理解することができない。このような方に日本語で診察できる機会を提供することがいかに有難いかイボチに住んでいる方が話していた。今回はリオグランデドスル連邦大学内科主任教授の森口エミリオ秀幸先生による、日系移民のための巡回診療に帯同させていただいた。

到着すると皆日本語で話しており、まるで日本の田舎に来たかのような錯覚を覚えた。血圧、尿検査、腹囲、心電図などの検査を行い、最後に森口先生の診察が行われた。同席させていただくと、本来ならば都市部の病院に呼ばれるはずなのに、病院に行けない方もいらした。このような方は不要な薬剤を服用し続けていたり、用量の調整が不適切なままであったりして、適切な処方箋に更新する必要がある。巡回診療に実際に参加させていただき、医療の行き届かない地域の方々への予防医学の啓蒙に対する熱い思いを学ばせていただいた。

続いてリオグランデドスル連邦大学病院を訪問した。こちらは公立の病院で、前日訪問した PUCRS の私立の大学病院と比較することができた。公立病院の苦しい財政状況が垣間見えたり、公立病院で働く医師の生活についても触れたりでき大変貴重な経験となった。

⑥ サンパウロ 8月12日～8月17日

サンパウロ大学にて日伯医学生会議を行い、次の日にポツカツを訪れ市庁舎表敬訪問、パウリスタ大学での日伯医学生会議を行なった。翌日再びサンパウロに戻り、Santa Cruz 病院見学、日伯援護協会訪問、ニッケイ新聞社訪問を行なった。サンパウロでの活動は多岐に渡るため、ここでは日伯医学生会議について記すことにする。

日伯医学生会議とは毎年我々が現地の大学生と行っている交流会のことであり、異なる3つのテーマを取り上げて、日本とブラジルの現状について、それぞれの学生がプレゼンし合い議論をする。今年のテーマは「医師の人口統計」、「脳血管障害」、「認知症と軽度認知障害」の3つだった。IMAの団員はポルトガル語でプレゼンを行った。会終了後には懇親会が行われた。全ての学生が英語を話すことができ、お互いの学生生活や将来の志望科などについて話しているとあっという間に時間が過ぎた。地球の反対側に医学を通じて友人をつくることができ、貴重な時間を過ごすことができた。またいつかブラジルや日本で会うのが楽しみでならない。



燃えるアマゾンから
帰還して下郷さとみ
(ジャーナリスト)

乾燥化が進むアマゾン熱帯林

「アマゾン森林火災の背後には政府を貶めたい NGO の存在がある」。NGO が自作自演で火を付けていると受け取れるそんな妄言をボルソナーロ大統領が放ったのは、私たちがちょうどアマゾン南部の森に入っている時だった。インターネットのある環境に戻った後でそれを知って、怒りよりも情けなさが込み上げてきた。

8月下旬から3週間かけて、アマゾン支流シングレー川流域の先住民族保護区の村々を訪問した。森に生きる先住民の自立支援を通してアマゾン熱帯林を守る活動を行う NPO 法人熱帯森林保護団体 (RFJ-Rainforest Foundation Japan) の支援事業フォローアップの旅に同行するためだ。年に1度の旅は今年で5回目になった。

4月から9月いっぱい続く乾季の終盤に毎年この地を訪れながら、年々進行する乾燥化と高温化を肌で感じている。「ここは灼熱砂漠か」と恐ろしくなるほど、今年はとりわけ過酷だった。日中の気温は連日 40 度を超えて、湿度はわずか 10 数パーセント。30 年近くこの地域に通い続ける RFJ 代表の南研子さんは、「ここまで環境が悪化したのは、ここ数年ほど」と実感を含めて言う。先住民の人たちも、「昔は乾季の終わりでも森の中は湿っていた。川の水量も減ってしまった」と顔を曇らせていた。

持続可能な伝統的焼畑が火災の原因に

大統領は「火災は先住民族の焼畑のせいだ」とも語っていた。しかし、そもそも彼らが営んできた伝統的焼畑は、熱帯林という環境に最も適した農業技術だ。半ヘクタールほどの小さな面積を切り払って火を入れて主食のキャッサバ芋を植える。数年もすれば畑のあちこちから樹木が芽吹いて森が再生し始めるので、別の場所に移って新たに火を入れる。そうやって森を壊すことなく営まれ続けてきた。

そのような持続可能な農業が火災の原因になるというのは、アマゾン熱帯林の近年の環境の変化のせいにはほかならない。以前は乾季の終わりでも湿っていた森の落ち葉は今ではカラカラに乾いて、歩けば足の下でバリバリと音を立てる。アマゾン南部の土壌は痩せた砂地だ。薄く積もった落ち葉を手で払えば、すぐに乾いた地面が顔を出す。以前は森に達すれば自然に鎮火し

ていた焼畑の火は、今は乾き切った落ち葉をくすぶらせながら、どこまでも燃え広がっていく。そうなれば、もはや消火の手の打ちようがない。

そのような状況下で、シングレー川の中流域に暮らすカヤボ民族とジュルーナ民族は 2015 年に合同で「先住民族消防団」を発足させた。延焼を起こさない焼畑の火入れ技術の普及や、火災の初期消火、金採掘人や木材伐採業者などの不法侵入を防ぐためのパトロールなど、消防団の活動は幅広い。RFJ はアマゾンの森を守る彼らの取り組みを初年時から支援している。今年 1 月からはトヨタ財団の助成を受けることにもなった。

森を守る「先住民族消防団」の活躍

本来、このような消防団は必要なかったはずのものだ。しかし急速に進むアマゾンの環境変化が、やむにやまれない活動を先住民族に強いている。森の乾燥化と高温化は、周囲の大規模農業開発の影響が大きい。シングレー流域の先住民族保護区の森は大農場に囲まれた、まるで緑の孤島のような。保護区の境界線をはさんで森の中と外とは、平均気温が 4～6 度も違うという研究報告もある。周囲の農場は 1 軒の面積が数千ヘクタール以上におよび、乾季には地平線まで木が 1 本もないむき出しの大地が土煙を上げて、乾き切った熱風を保護区の森の中まで送り込む。

アマゾン地域では農場面積の 8 割を残置森林として残さなければならぬとする法の規定があるが、ほとんど守られていない。環境犯罪の取り締まりを担う政府機関は現政権下で弱体化されて、違反の摘発や罰金の徴収は停滞したままだ。また今年 5 月には大統領の長男であるフラビオ・ボルソナーロ上院議員が農場の残置森林規定を実質撤廃する法案を国会に提出している。先住民族保護区の中で先住民族の同意なしに大規模農業開発や地下資源開発を可能にする法改正の動きも盛んになってきた。

「アマゾン地域の貧困問題の解消のために開発が必要だ」と大統領は言うが、それは詭弁だろう。真つ当な所得再分配制度の不在や、大土地所有者や産業界による巨額の脱税・滞納などの不正義を放置したまま、ブラジルの激しい社会格差の改善はない。このまま大規模開発に舵を切っても、開発景気に惹かれてアマゾンへと向かう人口の増加に伴って貧困層の絶対数が増すだけではないだろうか。

アマゾンからサンパウロに戻った直後に、私が住む千葉県南部は台風 15 号の大きな被害にみまわれた。地球規模の気候変動によって、今後も異常気象の多発は増加の一途を辿るだろう。先住民族保護区の森はアマゾン全体の炭素貯蔵量の 2 割を占めると言われている。憲法が先住民族の権利を保障する先住民保護区は、アマゾンの森を守る最後の砦だ。その森を守る消防団の若者たちの命がけの活動を、これからも応援し続けたい。



▲延焼を防ぐために焼畑の火入れに立ち会う先住民族消防団の団員たち

ティー・エス グループ 日本での活動

斎藤敏男

(株式会社ティー・エス 会長)



ティー・エス グループは、2015 年に私が設立した株式会社ティー・エスを中核とする企業グループ。人材派遣業の「株式会社 ティー・エス」に加え、農業生産法人の「ティー・エスファーム」、「学校法人 ティー・エス学園」、埼玉県認可保育所である「れいんぼー保育園」の 4 団体で構成される。これらが相互に助け合う形をとることで、経営の安定と地元への貢献を達成している。

株式会社ティー・エスは、1995 年に設立され、私は会社の経営方針として全国のパートナーと個人的信用を築くことに力を入れてきた。パートナーとの関係強化のために全国を飛び回った。

このようにして築いたネットワーク力を活用しつつ全国から優秀な人材を採用・確保することができた。また、事務所近隣に家族で生活できる生活備品付きの社宅を完備し、全国から引越してきて翌日から安心して就労できる環境を整えた。このような方針の下で企業活動を継続する中で、最盛期には、埼玉県を中心に 400 人以上の人材を派遣するまでになっていた。しかしながら、2008 年にリーマンショックが発生したのを境に経営が大きく悪化した。

せっかくここまで育てた株式会社ティー・エスは、存続の危機に直面することになってしまった。大きなショックを受け、悲嘆にくれる日々が続いた。しかし、悩んでばかりいても仕方がないので、どうやって会社を立て直すかを考え始めた。そんな時、目を付けたのが農業だった。



安定した農業経営が加われば、人材派遣業の不振をカバーすることも可能かもしれないと考えたのである。農業経験のない私にとってすべては未知の領域で、地元の方々の助けも借りて試行錯誤の毎日が続いた。地元の方々や役所のご支援も得て耕作用の土地を確保し、農業生産法人のティー・エスファームを立ち上げることができた。作物を何にするか検討に検討を重ねた結果、消去法で最後まで残った地元の優良作物である「ねぎ」を栽培することに決めたのである。結局、この決断が大きな成功につながった。現在、毎日 7 トン～8 トンのねぎを出荷している。年間では約 2,500 トンに上る。ブランド名を「葱王 (当初は「ねぎ王」)」として販売した結果、好評を得て、現在の出荷先はデパートや有力スーパーである。

株式会社ティー・エスを立ち上げた当時、家族同伴の派遣社員の希望として多かったのが、子弟の教育のための学校であった。そこで、学校法人ティー・エス学園を設立した。外国人児童対象の教育機関として子弟に対する教育を行ったところ、働いている間子供を安心して預けられる学校として好評であった。このことは、派遣人材の定着という効果も生んだ。この学校では、ブラジル人子弟のみならずフィリピン人等の外国児童も受け入れている。将来的には、インターナショナル・スクールにする構想だ。また、日本では保育園不足が大きな社会問題となっていることも踏まえ、埼玉県認可保育所である「れいんぼー保育園」を設立した。現在「学校法人ティー・エス学園」に 56 名、「れいんぼー保育園」に 41 名の児童が在籍している。

私は、ロンドリーナ州の大学で体育教師をしていたが、私いわゆる出稼ぎブームに乗って 1990 年に来日した。当初は、妻と二人しゃにむに働く日々が続いたが、もともと世話好きで、すすんで同僚の手助けなどをしてきたこともあり、それを見ていた知人の日本人経営者の勧めもあり、派遣会社を興した。ブラジル人のメンタリティーをよく知り、面倒見もいいということで、好評であった。他方、受け入れ先からは、派遣人材に対する日本語教育や日本市場についてのオリエンテーションなどが好評であった。現在、リーマンショック以前の 400 人には及ばないが、約 100 名の人材を派遣しており、受け入れ先からは高く評価されている。人材派遣業は、最近では、同業者も多く、過酷な競争に直面しているが、質の高い人材という点では、一歩抜きんできていると自負している。

日本に対する気持ちは「感謝」である。幼少のころから父に、「世の中に感謝して、お返しをするように」と常に言われ続けてきた。その言葉を少しでも実践すべく生きてきた。職場のブラジル人同胞の手助けや会社を興してブラジル人派遣労働者の職場環境の整備等に取り組んできたのもそのような父の言葉に応えるためだ。

2011 年の東日本大震災の際には、今こそ日本に恩返しの時が来たと考えた。被災地の希望を聞いたうえで、コメを 3 トンかき集め、震災の 2 日後には被災地に向かった。この話は、テレビでも取り上げられ、「家族を守れ、神様のバス」として報じられた。

私は、もうブラジルに戻るつもりはない。その代わりに、私ここにいて次世代の人々を支援していきたい。現在、2 名の枠で奨学金を支給し、若い世代の大学進学を支援している。年間一人 100 万円を支給しているが、将来的には、さらに枠を拡大したい。

平成 30 (2018) 年度の外務大臣表彰をいただいた。この栄誉に応えるべく今後とも日本とブラジルの関係強化のために努力していきたい。

(本稿は、編集部が本人にインタビューした結果をもとに取りまとめたものです)

スタートアップへの投資



柏 健吾
(TMI 総合法律事務所
日本法弁護士
現在ブラジルで勤務)

1. スタートアップ投資の状況

ここ数年、ブラジルでもスタートアップへの投資が大きな注目を集めている。ソフトバンクグループは、50億米ドル規模の中南米市場に特化した投資ファンドを設立し、2019年だけで、ブラジルのスタートアップであるGympass（フィットネスジムのサブスクリプションサービスを提供）、Creditas（自動車や不動産を担保とする個人向け貸付けサービスを提供）、Loggi（配送アプリを提供）などに大型投資を実行している。ブラジルでは、時価総額が10億米ドルを超えるいわゆるユニコーン会社がすでに10社以上誕生しており、今後もスタートアップへの投資は増えることが見込まれる。そこで、本稿では、ブラジルにおけるスタートアップ投資の実務について解説する。

2. スタートアップとの協業方法

スタートアップが有する技術やビジネスモデルを自社のサービスに利用する方法としては以下の方法が考えられる。

方法	論点
共同開発	・知的財産権の帰属 ・独占権の有無 ・費用負担
ライセンス契約	・ライセンス対象の地域 ・独占権の有無 ・ライセンス契約のINPI（ブラジル産業財産庁）への登録
投資	・取得する株式数 ・株主としてのリスクの回避方法

共同開発やライセンス契約であれば、投資家からすれば、投資した金額を失うリスクがなく（スタートアップの多くが失敗するといわれる）、また、後述の株主としての責任を負うこともない。スタートアップとしても、株式の希釈化の問題が生じないし、投資家から経営について意見を言われることもない。一方、これらの方法は直接的な金銭投資ではないことから、スタートアップのビジネスを急拡大させることは難しい。また、直接投資であれば、投資家は株主になるため、スタートアップとより深い関係を構築することができ、その結果として、スタートアップの動向（開発状況、進出先、買収可能性等）をよりよく知れることになる。

3. どの程度の株式を取得すべきか

ブラジルの会社形態の多くはSociedade Limitada（以下「Limitada」）又はSociedade Anônima（以下「S.A.」）のどちらかである。会社の支配権を取得する株式数（日本法で言う特別決議）は、Limitadaの場合75%、S.A.の場合過半数である。そのため、法的に会社を支配したいのであればこの割合以上の株式数を取得する必要がある。もっとも、仮にこの割合未満であっ

ても、投資者及びスタートアップ間で締結する契約において、投資者の拒否権や役員選任権を規定することで投資者が一定のコントロールを得ることは可能である。

4. 株主としての責任

Limitada、S.A. いずれにおいても、株主の責任は原則として有限責任である。ただし、ブラジルの場合、必ずしも常に有限責任ではない。その顕著な例が労働債務である。ブラジルの労働法は、同一の経済グループに属している会社はそれぞれグループ会社の労働債務について責任を負うというルールがあり、これにより株主であっても労働債務に関して責任を負うことがある。そのほか、税務債務、環境責任、汚職に関する責任などについても株主が責任を負うことがあり得る。この点は、株主の有限責任が確立している日本と大きく異なる。そして、スタートアップの場合、管理部門人員の不足などから法令遵守の意識が低いことも多く、株主としての責任を回避する方法についてはより慎重に検討する必要がある。

5. スタートアップへの投資方法

上述のとおり、ブラジルにおいては株主の有限責任は絶対ではない。これを回避するために一般的に取られる方法が転換社債による投資である。転換社債は、一般的に、英語では「Convertible Note」と呼ばれ、ポルトガル語では「Mútuo Conversível」などと呼ばれる。これは、貸付金の形でスタートアップに投資し、スタートアップの会計上も負債として計上される。そして、契約で定められた条件のもと、投資者は当該貸付金をスタートアップの株式に転換する権利を有する。この方法では、貸付金を株式に転換するまでは、投資者は株主ではないので上述の株主としての責任を負うことはない。

なお、シリコンバレーや日本のスタートアップ投資においては、投資家の権利を保護するため種類株式を発行することが多い。一方、ブラジルにおいては、最も一般的な法人形態であるLimitadaが種類株式を発行できないため、種類株式を発行するためにはS.A.に法人形態を変更する必要がある。

6. スタートアップ投資の交渉・書面作成

スタートアップ投資の歴史が長く件数も多いシリコンバレーでは、スタートアップに投資する際の実務（投資スキームや締結する契約の種類や契約条項）がある程度確立している。そのため、当事者は、そのような「基準」に従うことで効率的に契約交渉や契約書の作成を行うことができる。一方、ブラジルでのスタートアップ投資においては、まだそのような基準が確立されていないため、事案ごとに当事者間が個別に協議して決める必要がある。そのため、契約交渉や契約書の作成に時間がかかることが多い。

世間の注目を集めている 税制改革案の概要



ビニウス・マルクス 吉田幸司
(KPMG サンパウロ事務所
タックスパートナー) (KPMG サンパウロ
事務所
パートナー)

皆さんがご存知のとおりブラジル税制は世界で最も複雑であると言われており、企業がブラジルにおいて効率的な運営を遂行するための大きな障害となっている。ほとんどの経済専門家は、ブラジルの潜在的な経済成長を実現するためには社会保障改革の次に税制改革を重要な構造改革として挙げている。

社会保障改革が下院を通過し（2019年9月末現在）その成立がほぼ確実となっている今、世間の注目を集めているのが税制改革といえる。今回はその議論されている税制改革の概要について、説明する。

税制改革案の概要

税制改革案を説明する前に、過去の変遷について簡単に説明する。ブラジルの税制改革は少なくとも30年前から議論され、これまで数々の提案がされたものの一つとして実現したものはない。今日まで税制改革が承認されない大きな理由として、税制自身の複雑さがある。各種税制が異なる政府レベルの管轄下（連邦、州、市）にあり、税制改革によって自身の歳入が減少したり、投資誘致の手段（特に州と市が実施する税務特典）が失われる事を懸念している。

このような過去の歴史があるものの、現在、ブラジル社会において税制改革なしでは、経済の発展が出来ないといった共通認識があり、税制改革実現に向けての土台は整いつつあると言える。

一方で税制改革に向けての阻害要因がまったくないというわけではない。税制改革の主導権を握ることは将来の選挙を有利に戦うことに非常に大きな功績となるため、改革の主導権争いが起きており、そのために複数の改革案が提起されている。

現在、以下の通りに5つの案が提起されている。

1 下院で議論中の改革案

非営利団体（CCiF）によって提案され、各案の中で最初に進展を見せた法案となっており、国としてサービス・商品の消費に対する付加価値税（通称IBS税）の創設を提案しているものとなる。

- 連邦税のIPI、PIS/COFINS、州税のICMS、と市税のISSを一つの税に統合
- 全てのサービス・商品に対して一律の税率
- 全ての税務特典を廃止
- サービス・商品の消費地での課税（仕向け地主義）（現在は一部の例外を除き、原産地主義課税である。）
- 特定の産業に対する物品税（例：燃料、タバコ、飲料）
- 連邦、州、市によって構成される委員会による税管理
- 移行期間を10年とし、その間、新税と現行税制の併存

2 上院で議論中の改革案

2004年の法案をベースとしており、当時の議会によって棄却されたもの。現在の上院議長により再度提案され、下院では別法案が議論されているが（上述参照）、それと並行して上院で議論中。

- こちらの案も付加価値税（通称IBS税）及び物品税（原油、燃料、タバコ、通信、飲料、車両等）の創設
- 現行の9つの税制の統一（IPI、PIS/COFINS、CIDE、IOF、ISS、ICMS、Salário-Educação及びPASEP）

c. 仕向け地主義への変更

d. 移行期間を15年

3 州の税務局長協議会（CONSEFAZ）による改革案

各州の税務局長官らによって最終化に向けて議論されており、今後議会に対し正式に提案される予定。

当該改革案は、下院で議論されている案と非常に似ているが（上記1参照）、いくつかの重要な点で違いがある。例えば、(i) 一部の現行の税務特典の維持（最も重要なものとしてマナウスのフリーゾーン）、(ii) 税管理の構成委員会から連邦を排除、(iii) 税収が減少する州に対する特別な補填制度、などがある。

4 ブラジル実業家による非営利団体（Instituto Brasil 200）による改革案

当該改革案は、金融取引に対して唯一の税制を創設し、その他の現行の税制（売上に対する課税、利益に対する課税等）を廃止するというものである。

5 連邦政府による改革案

今後、連邦政府からの公表される予定であるが、連邦政府案は、以下の3つの柱をベースとしている。

- 下院で議論中のIBS税（上記の1.参照）に非常に似た連邦VAT税を提案。ただし、売上に対する連邦税（IPI、PIS/COFINS）のみを統一するものであり、ICMS及びISSは現行維持。
- 給料に対する社会保障料（現在は約20%）を減額し、金融取引に対する新たな税制を創設。
- 法人所得税を現行の34%から20%～25%への引下げ及び配当に対する課税（現行では配当収入は非課税）。

しかしながら、2019年9月11日に突如ブラジル連邦歳入庁次官マルコスシントラ氏が解任され、連邦政府の提案内容に不透明さが増している。連邦政府は、自らの提案を見送り、その代わりに上述した議論中の改革案の1つを後押しする方針にシフトするのではないかと噂もある。

現在議論されている税制改革案であるが、これは、現在の税負担全体を減らす（もしくは増やす）ことは目的としておらず、あくまで長年企業を悩ませている複雑な税制の簡素化を目指すものである。

どの法案が承認されるか、それが企業に与える影響などについての議論はまだ時期尚早であるといえ、今後、各法案がビジネスに与える影響を見極めるために詳細が公表が待ち望まれる。現行の改革案にVATの創設が含まれていることを考慮すると、サービス業、税務特典を享受している会社及び通信、エネルギーと行った特定のセクターの会社は、他の企業よりも大きな影響を受ける可能性がある。

また、買い手へVATクレジットを完全に保証するVATシステムが提案されていることを考慮すると、当該影響は、サプライチェーン全体を含めて分析することが必要になるであろう。

ブラジル税制の簡素化は絶対に必要であることからすると、この目的達成を阻害するような事象が生じるような場合に事前対応が出来るようにするなどこの議論を今後、注視しておくことが重要であると言える。

ブラジルに渡って40年 (後編)



飯島秀昭
(美容師)

1500年代ポルトガル人に新大陸として世界に紹介されて500年の歴史を持つブラジルに渡って40年が過ぎた私。

埼玉の片田舎で昭和25年に床屋の次男として生まれ、埼玉で美容師の免許を取得して20歳で上京した。田舎育ちの自分がまさか東京に出るなんて予想もしていなかった事が起きた。そして東京最後の5年間は東京の原宿というファッションエリアで働くことに。アメリカから帰国した今井英夫氏の経営するサロンで勤務させて頂いた。まあ今井氏との出逢いが美容師として自分の価値観の向上に大きく影響した。場所柄お客さまも一流どころが集まっており、芸能関係者やファッション関係者そして芸術家など素晴らしい空気を吸う事が出来た。そして大きな夢を見ることも出来たし、美容師としては素晴らしいステージに上っていた。

結婚して1児の父親となったが、ほぼ年中無休状態で子供とも顔を逢わせることも無くただただ仕事に夢中になっていた時に息子と対面、そして人生を変える一言、息子が私に向って(おじちゃん)といったのがこたえた。

大人になったら良いお父さんになろう、そして良い旦那になろうと思っていた少年時代を思い出したが、この一言で東京生活にピリオドを打つ決心する。

20歳の頃、いつかチャンスがあったら海外で生活してみたいと思っていたものの、結婚して父親になりその夢も諦めようと考えていたのだ。だが、このまま田舎に帰って人生に後悔は無いだろうか、と自問自答を繰り返すうちに子供が学校に入学するまでちょっと時間がある、一度海外に出よう、と決めた。当時永住権の取れる国はブラジルだった。そして1979年6月15日成田空港からブラジルへ。まあ海外で生活する事は想像以上に大変であるとは覚悟の上だったがその想像をはるかに越える現実と直面することになったが、でも今までどこかに潜んでいた闘争心が顔を出してきた。

サンパウロで3年間の下積みをして1982年9月15日(その日は32歳の誕生日だった)SOHO(蒼鳳)というサロンをオープンした。

このサロンのテーマは、ブラジル社会に日本と自分を問う、というもので、ブラジルでは考えられない人材養成と時間厳守を最も重要視した。当然ながら、当初は友人からは猛反対を受けた。人材養成は敵を作るようなものだ、と。そして時間厳守なんてこのブラジルでは通用しない、絶対不可能だ、と。逆風は本当に強く何回も挫けそうになるが自分を信じて前進した。まあ信念のようなものを持って前

に進むと僅かながら結果が出て来るものだ。

借金で始めた第1号店。人材養成には時間も金も掛かる、でも人材を作らない限り会社の発展は無いと信念を持って継続する。そして時間厳守も当初は大きな反感すらあったが、時間が経つに連れて時間厳守が逆に大歓迎されるようになった。ブラジル社会では今でもブラジル時間は通用するが大きなロスが発生していることは、ご存じの通りだ。そして2年後2号店そしてまた2年して3号店と人材養成も時間厳守も少しずつ形になった。

25年経った2007年にはSOHOもサンパウロに30店舗、従業員1,000人以上のサロンそして月間6万人をアテンドする会社に成長したが、日本でも月間6万人アテンドするサロンは極僅かと思う。この25年の間には年間3,000%を超えるハイパーインフレもあり、預金凍結と言う日本では考えられない事も起きた。荒れに荒れた時代であった。昔日本でも東京は生き馬の目を抜くと言われてたが、ブラジルは一瞬の気のゆるみが命取りになる。全身全霊で闘う事が必須だったが、これがまた快感でもあった。苦勞はする暇も無かったし、大きな試練は数数えられない程襲ってきたが、試練を乗り越えると今まで見たこと無い絶景がみえてきた。この荒波を乗り越えられたのは信念を持って事に当たったお陰だと思っている。お客さまにより安全に、より確実に、より早く、より安く、より綺麗に、そしてより近くで。金儲けが一番でなく働く人がハッピーにそして来てくれるお客さまがハッピーになってほしい、と。

今はもっと大きなチャレンジ、会社を老舗にする為に闘っている。32歳で創業そして息子が32歳で2代目。50周年の時に3代目に継承出来たら老舗として大手が振れるのではないかと想っている。あと13年、しっかり見届けて安堵して次の世界に旅立ちたいと思っている。

ブラジルで学んだことは本当に沢山あるが、「仕事も遊びも人生も絶対楽しくなくてはいけない」を勉強させていただいたのが私の人生を大きく変えた要因だった。

私達の職業でも日本は限界に達している。人材不足そして価格競争。日本人の極めの細かい気遣いそして正確な技術は絶対に世界に通じると思う。また日本で発展しようとしたら絶対的にこの職業を楽しめる職業にする事が必須と思う。

人生に悔いを残さない為に毎日精一杯出来る事をやっている。



ブラジルお産事情とドゥーラ

鈴木友紀菜
(ヨガ・インストラクター)

ブラジルの「非人道的なお産文化」に風穴を開けた JICA の「光のプロジェクト」をご存知だろうか。日本の「人間的な出産と出生」をブラジル地方都市に伝道した事業であった。筆者は、その事業の立役者でもあった小貫大輔教授ゼミの卒業生で、少なからず影響されたのか、渡伯以来、お産に関しては度々思うところがある。

世界の分娩総件数に占める帝王切開率の平均推移は、12.1% (2000年) から 21.1% (2015年 WHO データ) と、約75%も増加した。日本でも、14.7% (1999年) から 20.4% (2017年) と増えている。

ところが、ブラジルは世界平均を凌駕する。ブラジルでは公式のデータが2014年以降しかないため長期の比較はできないが、2018年全国平均は世界平均の約2.65倍に相当する55.97%の帝王切開率だ。この数値は過去5年間で大きな変化はない。

そして、驚くべきことに大都市の最先端私立病院では帝王切開率は全国平均より更に高く、病院によっては90%を超過する。WHOによれば「10%~15%を超える帝王切開率は、新生児や母体の死亡率を下げるためのリスクヘッジに因るものではない」のだから、ブラジルの妊産婦が希望する人間的なお産過程が本当に尊重されているのか、心配である。

こうした実情を打開すべく女性たちが立ち上がっている。自然

分娩や妊産婦の希望するお産過程を推奨するための取組みが拡散している。又、保険法も整備され、帝王切開とした場合の理由と状況の証拠書類を残すよう義務付けるなどしている。そして、筆者が特に関心を寄せているのがドゥーラ (Doula) の存在だ。女性を尊重し、お母さんと赤ちゃんが安全で幸せな出産と出生を迎える為に重要な役割を果たしている。病院や医師と頻りに連絡を取り合い、最新のお産事情を把握し、妊産婦のお産計画と一緒に考え、妊産婦の希望を叶えるお手伝いをする、いわば「お産パートナー」である。

陣痛が始まったらすぐに妊婦の元へ駆け付け心身のケアをし、陣痛がきてから何時間後に病院へ移動するか等、適切な指導をしてくれる。また病院に着いてからも「子どもの安全を第一に、帝王切開を」と言われればきちんと事実関係を確認する。実際に利用した人からは、「お産の専門家が側にいてくれることで安心して出産に臨めた」、「医師の都合でなく我が子のペースを尊重して誕生の瞬間を味わうことが出来た」といった声を聴く。

お産事情は全く日本と異なる。帝王切開が多く多くの命を救ってきたことも事実ではあるが、医師でなく、母子主体のお産が尊重される社会にブラジルも近づいてくれればと、切に思うこの頃である。

ジャーナリストの旅路

リオデジャネイロと東京、五輪に想う

平山重理
(朝日新聞東京本社社会部)

10年前、私はブラジル・リオデジャネイロのコパカバーナ海岸で息を潜め、その瞬間を待っていた。2016年の五輪開催都市の発表があったのだ。当時、サンパウロ支局の特派員だった。

「リオデジャネイロ」。

コペンハーゲンで、名前が読み上げられた時、集まった数万人の人たちは抱き合い、歓声を上げ、「私たちの番がやっと回ってきた」と喜んだ。ライバルだった東京、シカゴ、マドリードを抑え、リオデジャネイロが、南米で初めての五輪の開催都市に選ばれた。

2009年10月2日のことだ。この日は私の誕生日だった。生まれたのは、リオデジャネイロ。特派員だった父の仕事の任地だった。生まれた日に、生まれた土地で、リオデジャネイロの様子取材することに、感慨を覚えた。

リオ五輪のプレゼンテーションで使われた映像は躍動感のあふれる楽しいものだった。「シダージ・マラビリョーザ」(麗しき町)という明るい曲をバックにし、道の清掃をする黒人男性がモップを持って踊ったり、漁師が網を縫ったり、乳母車を押した母親が海辺を走ったり。スラム街の人たちも出てきて、生き生きした様子だった。

ブラジルなんか、ファベラもあり貧しく、危険で、五輪を開くなんて無理だとずっと言われてきたが、私たちにも五輪を開けるとやっと証明できたと、当時のルラ大統領が、泣きながら国民に語りかけていた。その言葉は、確かに私にも響いた。

「何、泣いているの?」と、隣で一緒にルラ大統領の話をテレビで見て、私をからかった日経新聞の特派員の目も、真っ赤だった。

それから7年後の2016年。私は、リオデジャネイロにいた。当時、ロサンゼルス支局の特派員だったが、リオ五輪の応援で1カ月滞在した。ブラジルのあまりの空気の変化に驚いた。各地でデモが多発し、金は教育や医療に使うべきで、五輪なんか使うべきじゃない、と多くの人が訴えていた。その後、リオ五輪の招致に関わった人々が逮捕された。経済も、治安も悪化している。

そして今、私は東京の社会部で、来年に迫った東京五輪を担当する。復興五輪だ、インバウンドだ、東京のレガシーだ……。スローガンが並ぶたび、なんともいえない不安を感じるのだ。今こそリオ五輪から東京が学べるのが、あるのではないか。そう感じる。

テーマはおカタイ歴史小説『奴隷制(第1巻)』がベストセラーに

岸和田仁 (『ブラジル特報』編集人)

“ブラジルの司馬遼太郎”ラウレンチーノ・ゴメス

総合週刊誌 VEJA の編集幹部から歴史作家に転じたラウレンチーノ・ゴメスの三部作の刊行年は、『1808』2007年、『1822』2011年、『1889』2013年、となっているが、いずれもロングセラーとなり、三冊の合計販売部数は現在までの累計で250万部を超えている。

三部作の第一巻となる、2007年に刊行された『1808』は、365頁もある分厚い本であるが、そのサブタイトルがやたらと長い。「狂った女王と臆病者の王子、そして墮落した王室が、いかにしてナポレオンを騙し、ポルトガルとブラジルの歴史を変えたか」と、人を食ったようなサブタイトルだ。

その本文の書き出しは、「現在の話に例えれば、ある朝、ブラジル国民が起きてみたら、大統領と閣僚全員、政府関係者合わせて数万人がオーストラリアに逃亡、政府はもぬけの殻となっていた、しかもその逃亡を米国空軍が援護エスコートしていた、というようなことであつたらう」とい

った調子で、進軍中のナポレオン軍がリスボンに到着する直前、パニックに陥りつつ、慌てふためきながらも、身の回りのものをかき集めて、王室関係者たちがブラジルに向けて集団脱走していった様子を叙述している。無味乾燥な文章が続く歴史研究書とは違って、歴史的事実を芸能雑誌風な文章も交えて語っていく、歴史ルポといったよい。

1807年11月29日に、集団で国を捨てたのは、ジョアン王子を筆頭とする王室関係者、貴族、軍人、判事、弁護士、医者、神父、商人など合わせて1万人とも1万5千人ともいわれているが、1807年当時のリスボンの人口は20万人程度であつたから、全人口の5%から7%もの人たちが、泡食って逃げ出したのだ。

当時の首都リオの人口は5万ほどであり、そこにポルトガル本国から1万人以上が突然闖入してきたのだから、一挙に20%以上も人口増となり、良くも悪くもブラジルの歴史が激変していくことになるわけだ。このドタバタ史実を追いかけたのが第1巻であつた。

ブラジルは世界最大の黒人奴隷輸入国

売れっ子歴史作家となったゴメスが次の作品のテーマに選んだのが、なんと、奴隷制というブラジル史上最大の負の遺産であつた。「我が国の歴史で最も重要なテーマは、(砂

糖～金～コーヒーという)経済サイクルでもないし革命でも帝政でもない。それは奴隷制だ。今日の社会不平等や人種差別問題は、この奴隷制時代の遺産であるからだ。」と考えたゴメスが、構想して執筆したのが、三部作『奴隷制』だ。

たしかに最新の歴史学研究によれば、奴隷貿易でアフリカ大陸から南北米大陸に強制連行された奴隷の数は“着荷ベース”で約1千万人とみられるが、ブラジルは世界最大の黒人奴隷輸入国でのべ480万人(全体の5割近く)も受け入れたのであり、奴隷制廃止(1888年)も世界で一番遅かつた国でもあつた。現在のブラジル社会が抱えている様々な不平等、差別構造のルーツが奴隷制に存するのは明らかだからこそ、左翼イデオロギーとは無縁な作家ゴメスもこのテーマに取り組む義務を感じたのだろう。

事前の調査に4年以上の時間を費やし、200冊もの関連文献を読み込み、アフリカ諸国(セネガル、ナイジェリア、アンゴラほか)はじめ12か国を訪問・調査し、多くの研究者を取材した成果である第一巻が刊行されたのが8月末であつた。刊行直後からベストセラー入りし、9月末現在、ノンフィクション部門で5週連続、不動の1位をキープしている。

第一巻が扱っている期間は1444年から1695年までだが、これはポルトガルで最初に記録されている黒人奴隷の競売が1444年で、1695年は逃亡奴隷王国パルマレスの指導者ズンビが殺された年であつたから、奴隷制時代の前期にあたる時期が対象だ。

こんなカタイ本がベストセラーになるのだから、「本を読む習慣がない」と決めつけられがちなブラジルの読者層をみくびってはいけな、と思うばかりだ。

米国でも奴隷制再考の動き

「アメリカの奴隷制は400年前の今月(8月)に始まった。この黒人奴隷制は米国の原罪とみなされているが、それ以上のものだ。それは真の意味でこの国の起源なのである。」

これは、「ザ1619プロジェクト」と名付けられたニューヨークタイムズ紙(8月14日付け)特集記事の書き出しである。このプロジェクトは、1619年8月20日、北米ヴァージニアのポイント・コンフォート港に最初の黒人奴隷20名が陸揚げされた、という歴史的事実を直視し、ポルトガル船籍の奴隷船が運んだ“黒い積荷”から始まった奴隷制のレガシーを再考しようというものである。

現実の大統領がいずれも白人至上主義者という米国とブラジル両国において、奴隷制を冷静に再考しようとの試みが作家や大手メディアによって取り組まれている。この事実をフォローすることこそ両国を理解することにつながると思われるが、さて。



■コロンビアにおけるアマゾン関係国首脳会合

9月6日付グローボ紙は、同日コロンビアのレシティアでアマゾン関係国首脳会合が開催され、アマゾン関係7カ国が参加した旨報じている。要旨以下のとおり。

- (1) 9月6日、コロンビアのレシティアで開催されたアマゾン関係国首脳会合には、アマゾン関係7カ国(伯、コロンビア、ペルー、エクアドル、ボリビア、スリナム、ガイアナ)が参加した。伯からは、ボルソナーロ大統領がビデオシステムを通じて参加し、現場にはアラウージョ外相が参加した。コロンビア、ペルー、エクアドル、ボリビアの大統領、スリナムの副大統領、ガイアナの代表が参加した。
- (2) ドッケ・コロンビア大統領は、アマゾンの森林火災を食い止めるため、各国に連携を呼びかけた。
- (3) ボルソナーロ大統領は、ビデオシステムを通じて約10分間に亘り発言した。同大統領は、伯で先住民保護区が設けられていることを批判しつつ、仏等の先進国により、アマゾン諸国の主権が脅かされていると発言した。
- (4) ボルソナーロ大統領は、今回コロンビアで署名が見込まれている協定では、アマゾン関係諸国の主権は、「交渉不能」なものである点を明確にされるべきであり、さらに、各国が自国の領土内でアマゾン地域に最適な政策を策定できるように断固とした立場をとる必要があり、その政策が他国によって取り扱われてはならない旨述べた。

■ボルソナーロ政権に対する世論調査：2019年9月

9月25日、IBOPE社は、ボルソナーロ政権に対する世論調査(実施日：9月19～22日、対象：126市町村における有権者2000人、CNI委託)を発表した。概要以下のとおり。

1. 政権支持率

- (1) 良い/非常に良い：31%
- (2) 普通：32%
- (3) 悪い/非常に悪い：34%
- (4) 不明/無回答：3%

地域別で最も大きな変動を示したのは南部で、「良い/非常に良い」の回答が36%に低下(前回6月：52%)。なお、政権支持率は南東部でも低下した一方、北部・中西部では上昇。教育レベル別では、高等教育を受けた対象者のうち37%が「良い/非常に良い」と回答し、最多となった。

2. 大統領に対する信頼度

- (1) 信頼できる：42%
- (2) 信頼できない：55%
- (3) 不明/無回答：3%

高等教育を受けた対象者のうち44%が「良い/非常に良い」と回答し、教育レベル別で最多を記録した一方、前回調査の50%から低下。

キャンパス・コラム

ブラジルの大学生と大統領選挙

佐藤海斗
(上智大学4年)

私は2018年の約1年間、サンパウロ大学に留学をした。その私が留学した2018年はトラック運転手による大規模なストライキ、ワールドカップ、大統領選挙のような印象に残る大きな出来事があった。このコラムでは、それらの出来事の中から私がブラジルの大統領選挙で感じたことについて書こうと思う。

10月のある日、いつも通り私は授業を受けようと大学へ行き教室で先生を待っていた。しばらくして、先生が教室に着くと「授業はなくなりました。」と言った。理由を聞くと、私の通っていた文学部の学生が大統領選挙である候補者の反対を呼びかけるパンフレットを配るので授業に出席できず、授業を行うことができないということだった。私はそのような理由で授業が休講になるなんて日本にいて考えたこともなかったのでとても驚いた。もちろん大学の文学部の人たちが全員がパンフレット配りに参加したわけではないだろう。しかし、授業ができなくなるということはそれなりの人数が参加したということだと思ふ。それだけ政治について考えたりする学生が多く、ただ考えるだけでなく行動を起こす人もいるということを知った。

大統領選挙の翌日には、大学内でボルソナーロ大統領の当選を祝う集会とボルソナーロ大統領に対する反対の集会が行われた。その前日に友人が、「その二つのグループ同士で衝突が起こるかもしれないから明日は学校に行かない方が良い。」と連絡をくれた。そもそも大学でこのような集会が行われるのも驚きだが、選挙が原因で衝突がおきる可能性があるほどの熱量が学生にあるということにも驚いた。

このような出来事を通じて、サンパウロ大学の学生は政治を自分のこととしてとらえているように感じた。

視点を変えて日本の大学生のことを考えた時に、選挙に関心を持っている人がどれだけいるだろうか。日本では選挙での若者の投票率の低さがよくニュースに取りざたされている。多くの大学生が政治を他人事としてとらえているからそのような結果になるのかもしれない。もちろん、サンパウロ大学の学生のように政治について考え、行動しなければならぬというわけではない。しかし、彼らのように政治を自分事としてとらえるのは大切なことなのではないかとブラジルの大統領選挙の時期の学生を見て感じた。

新刊書紹介



◆◆◆◆◆ 新刊書紹介 ◆◆◆◆◆

『島々百景』(宮沢和史著)

月刊『ラティーナ』に3年にわたって連載された島紀行エッセイを一冊にまとめたもの。南は沖縄本島、与那国島、石垣島、南大東島、屋久島など、北は利尻島、知床半島、サハリンも、海外ではハワイ、アソレス諸島(テルセーラ島)、ジャワ島、ジャマイカ、キューバ、イタバリカ島(サルヴァドル)など。詩人ミュージシャンらしい達意の文章が綴られ、読者は宮沢ワールドに引き込まれる。そのうちの一章は「サウダーヂとは」だ。

(ラティーナ 2019年7月 167頁 2,500円+税)

『スタン・ゲッツ 音楽を生きる』

(D・L・マギン著、村上春樹訳)

20世紀初頭ウクライナから逃れてきたユダヤ人移民の三世として生まれたゲッツは、17歳でプロのテナー・サ

キソフォン奏者となる。ドラッグとアルコールにまみれた熾烈な人生を詳細に語る評伝(原著は1996年刊)には、トム・ジョピン、ジョアン・ジルベルトとの出会い、『イパネマの娘』がもたらしたボサノヴァの世界展開、そして、アストラッド・ジルベルトとの秘められた恋も書き込まれている。ゲッツはボサノヴァ伝道師でもあった。

(新潮社 2019年8月 587頁 3,200円+税)

『越境する音楽家たちの対話』

(関口義人著)

現役ミュージシャンによる対談16本を収録。本書を読むと日本の音楽シーンの多様さ多様さに感動することになる。アラブ音楽やユダヤ音楽(クレズマー)で現地ライブも楽々とこなす才人(大熊ワタル、岡庭矢宵、木村伸子ほか)もいれば、バンドネオンの達人(小松亮太)もブラジル音楽関係者(Saigenji、笹子重治、岡部洋一ほか)も。戦後間もなくのジャズ、タンゴブームの“一点主義”を想えば、その広がり度合いはすさまじく面白い。

(彩流社 2019年7月 237頁 2,500円+税)

『支配と抵抗の映像文化』

(E・ショハット・R・スタム著、早尾貴紀監訳)

米国の映画学者による、ポストコロナ映画論集。ハリウッド映画における人種やジェンダーの描き方、欧米中心主義を批判し、多中心的多文化主義を主張。第三世界の映画を論じ、ポストモダン時代における多文化主義のあり方を問う。ブラジルのシネマノヴァの作品群(ローシャの『狂乱の大地』、ディエグスの『キロンボ』、ペドロ・デ・アンドラーデの『マクナイーマ』、ネルソン・ペレイラの『乾いた人生』など)に多くの紙面を割いている。

(法政大学出版局 2019年2月 572頁 5,900円+税)

『奴隷船の世界史』(布留川正博著)

ロビンソン・クルーソー物語から説き起こし、奴隷貿易や奴隷制に関する主な学説・論争を丁寧にフォローしてから、1990年代から国際的な展開をしてきたTSTD(環大西洋奴隷貿易データベース)の最新データを読み込んでいく。奴隷船の実態や奴隷貿易廃止・奴隷制廃止への道のりを要約的に叙述しているが、ブラジルが世界最大の黒人奴隷輸入国(約1千万人のうちの480万人も導入された国)であったことを再確認することになる。

(岩波新書 2019年8月 240頁 860円+税)

!!「ブラジルあれこれ」!!

ベレンのブックフェア

今年は、日本人アマゾン移住90周年の節目の年にあたり、ベレン、トメアスー及びマナウスにおいて記念式典が行われ、数々の記念事業が実施された。

遡ること4年、2015年には、日本ブラジル修好通商航海条約120周年を記念して全伯的に400を超える記念事業が行われた。この記念すべき年にあたり、パラ州でどのような記念事業を実施するかについて相談すべくジャテーネ州知事を訪問した。ジャテーネ州知事は、ベレンのブックフェアで日本をテーマ国にして記念事業を実施するのがいいだろうとして、早速パウロ・シャーベス文化長官に検討を指示した。その結果、ブックフェア会場のHANGERに州政府のスタンドが設置され、日本文化の展示が行われたほか、汎アマゾン日伯協会が連日踊りや太鼓等のパフォーマンスを披露した。日本からも、国際交流基金の助成を得て、武家茶道石州流伊佐派の家元一行が現地を訪れ、茶道のデモンストレーションが行われ、地元の人々の好評を博した。ちなみにパウロ・シャーベス文化長官は、パラ州を代表する建築家で、観光ポイントであるEstação de Docasやブックフェアの会場であるHangerなどベレンを代表する多くの建造

物の設計者として知られる。

ベレンのブックフェアは、正式には、汎アマゾンブックフェア(Feira Pan-Amazônica do Livro)と名付けられている。毎回、30~40万人が訪れるとされ、学生や生徒が本に触れる貴重な機会を提供している。実際に筆者が会場で観察したところ、連日教師に引率された生徒たちでにぎわっていた。1997年に第一回が開催されて以来今年で第22回を数える。また、2万4千㎡の広い会場を利用して、アマゾン地方の文化を紹介する展示、文化や文学、言語に関するワークショップなど多彩な催しが行われる。

また、これまで毎年テーマ国が決められ関連行事がおこなわれる

2001年以来、ヨーロッパ、中東、南米の国々がテーマ国になったが、日本は、ポルトガルとともに二回テーマ国となった数少ない国の一つである。

2016年の数字では、販売された本は、75万5千冊、展示された本は9万7千冊にのぼる。直接あるいは間接に参加した出版社は、約500社、約60%は地元企業、その他は、国の内外から参加している。総売り上げは、1360万リアルであった。

Churrascaria
Que Bom!
www.que-bom.com

Produzido pela
ATHLETA®

LOJA ASAKUSA
TEL: 03-5826-1538
TOKYO-TO TAITO-KU
NISHI ASAKUSA 2-15-13 Nikkoshi B1F

LOJA SHIMBASHI
TEL: 03-6402-5685
TOKYO-TO MINATO-KU
SHIMBASHI 4-1-1 SHINTORA CORE 2F

日本ブラジル中央協会 — イベントのご案内 & お知らせ —

イベントのご案内

HPの申込みフォームからお申し込み下さい。
<http://www.nipo-brasil.org>

11/7

サボイア駐日ブラジル大使 講演会

演題: ブラジル経済見通しとその投資機会

日時: 2019年11月7日(木) 16:00~17:30

場所: Crosscoop(アーバンネット内幸町ビル3F)
港区新橋1-1-13

参加費: 個人 1,000円、法人 2,000円、非会員 3,000円

11/12

星野前リオデジャネイロ総領事(現JETRO理事) 講演会

演題: リオから見たブラジル

日時: 2019年11月12日(火) 15:00~16:30

場所: 田中田村ビル
港区新橋2-12-15

参加費: 個人 1,000円、法人 2,000円、非会員 3,000円

11/19

東京コンサルファーム ブラジル税務、会計、労務セミナー

日時: 2019年11月19日(火) 14:00~16:00

場所: 米州開発銀行アジア事務所会議室
千代田区内幸町2-2-2 富国生命ビル16F

参加費: 無料

12/17

年末フェスタ ブラジル音楽とアミーゴの楽しい夕べ

日時: 2019年12月17日(火) 19:00~21:00

場所: ロック・フィールド東京オフィス1F
中央区日本橋室町4-5-1

参加費: 会員 5,500円、非会員 7,000円

法人・個人・学生

皆様のご入会を心よりお待ちしております

新規会員募集中

会員数 法人会員 126社
(2019年10月現在) 個人会員 約416名

当協会の活動目的「日本・ブラジル両国間の相互理解、友好関係の促進に寄与する」にご賛同・ご支援頂ける方に、会員となることをご検討いただければ幸いです。

会員特典

- 協会会報「ブラジル特報」の無料配布
隔月発行、年6回配布。
- 会員価格にて、講演会等のイベント、ポルトガル語講座に、参加できます(会員限定イベントへも参加いただけます)
- 会員交流懇親会へ参加いただけます
- ホームページにて、会員限定情報をご覧いただけます

年会費

法人会員 1口 20,000円 / 個人会員 1口 10,000円
(2口以上) (1口以上)

※入会金は不要です

お申し込み



《日本ブラジル中央協会公式HP》

<http://www.nipo-brasil.org>

日本ブラジル中央協会

ジルソン・マルチンス 日本初上陸

ブラジル、リオデジャネイロの人気バッグブランド
ジルソン・マルチンスが日本初上陸!



ジルソン・マルチンスの商品は直営店または
ウェブショップにてお求めいただけます。



ウェブストアのご注文はこちらから!
online shop.
<https://shop.coloridas.jp>



coloridas SHOP Aoyama
東京都渋谷区神宮前 3-38-11
原宿ロイヤルビル 1F 2号室
営業日: 火~土 13:00~19:00 (日・月曜 定休日)

coloridas
ジルソン・マルチンス日本輸入総代理店
東京都渋谷区神宮前 3-42-11 ローザビアンカ 201
コロリーダス株式会社
MAIL: bio@coloridas.jp TEL: 050-5585-1090
WEB: <http://coloridas.jp>



TRADE & DEVELOPMENT BANK
モンゴル貿易開発銀行東京駐在員事務所

“蒼天よりも高く”

突き抜けるような雲ひとつない青い空 — 蒼天(そうてん)
モンゴルは蒼天の国です。そのモンゴルでリーディングバンクとして活躍している銀行がTDBです。日本とモンゴルの間の貿易・投資に関わる貿易金融や外国為替を取り扱っています。私たち東京駐在員事務所はモンゴルの蒼天につながる日本の玄関口です。日本のお客様からのご相談をお待ち申し上げております。



ブラジル赴任の前に ビジネスで使えるポルトガル語を



ブラジルでビジネスや生活をする上で
欠かせないのがポルトガル語です。
BrAsia(ブレイジア)では、
赴任前と赴任後の語学研修を提供します。
「講師任せにはしない」
現地に精通したスタッフが進捗を管理します。

BrAsia(ブレイジア) 運営: 株式会社 漢和塾 〒104-0061 東京都中央区銀座1-14-12 楠本第17ビル5階
TEL03-6263-0716
お問い合わせは E-mail: brasia@kanwajuku.com HP: <http://brasia-j.com/>



モンゴル貿易開発銀行東京駐在員事務所
〒100-0005 東京都千代田区丸の内1-4-1
丸の内永楽ビル2303
TEL: 03-4588-3945
FAX: 03-4588-3947
<http://tdbm.jp/> 詳しくはコチラ→



●最寄り駅: 東京メトロ東西線大手町駅B1出口直上



世界は鉄でできている。

「あ!ここにも。あそこにも」私たちの生活は大小さまざまなカタチの鉄に支えられている。それもそのはず。実は地球の重量の約1/3が鉄なのだから。3500年以上前から、この身近な素材を使うことで進化してきた人の暮らし。今だって柔らかな鉄、軽い鉄、小さな鉄…。鉄の可能性は広がり続け、人の暮らしの可能性も広がり続けています。



NIPPON STEEL

新日鉄住金は日本製鉄へと社名が変わりました。